

平成二十九年 度 聖ドミニコ 学園 中学校 入学 試験 (第一回)

国語

◎ 次の注意事項を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題はぜんぶで8ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点や「」をすべて一字に数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、本文を一部改めた）。

いまの社会で「君」や「ぼく」が幸せに生きるってどういうことだろう。社会学者はこれまで「人が幸せに生きるのはどういうことなんだろう？」と① 絶えず考えてきた。そのひとりであるぼくは、「人が幸せに生きる」ために2つの条件が必要だと考えてきた。まず「自由」であること。□ X 大昔の人たちは学校に行かなかった。当たり前の話だけど、学校がなければ学校には行きようがない。学校がない時代の人は、そもそも学校に行くという選択肢がないから、学校に行かないことを「不自由」だとは思わなかった。

やがて、お金持ちの家の子は学校に行けるけど、貧しい家の子は行けない、という時代がやってくる。□ Y 学校に行くという選択肢を知っていても選べないという「不自由感」が生まれる。逆にいうと「A 選択肢を知っていて、それを選べる」から「自由」なんだね。

時代が変わって、多くの人が学校に行くようになって、学校には行っているけれど、何を学んでいいのかわからないという状況が生まれる。ということとは、「自由」であるには、「選択肢を知っていて、それを選べる」以外に「B 選ぶ能力」があることも重要だということだ。テレビの例がわかりやすい。いまの時代、ほとんどの家にテレビはあるし（自分の部屋にもあったりワンセグで見たりもする）チャンネルも何百とあるけれど、どの番組を見たらいいのか、何を楽しくめばいいのかわからない——そう感じたことって君にもあるんじゃないかな。

いま、ぼくたちが生きている社会は、まさに□ C この段階にあるん

だ。実際、ぼくが教えている大学でも、高校まで同じクラスでいっせいに授業を受けてきた学生が、入学したとたんに、どの授業を選べばいいのかわからなくなつて、相談室にかけこんだりするのを見してきた。

君がそうならなかったためには、いまのうちから「自分で選ぶ」訓練をすることが大切だ。君は、楽しいにしろ、つらいにしろ、いまそこにおいて、ある環境を生きている。この環境は君が作ったものじゃない。でも「ただ受け入れている」のは君だ。つらいのは誰のせいだろう。

ここで3つの考え方があつた。1つは、環境を作った大人たちが悪い、というもの。もう1つは、環境をつらいものだと感じる君自身の境地在問題だ、というもの。最後の1つは、環境を変えようとしてない□ A な君が悪い、というもの。いつもこの3つがあるんだよ。環境を作った人たちが悪いんだ——そうだろう。でも、② セキニを取らないで問題を先延ばしにして子どもや子孫たちに不幸をおしつけるような大人たちは、どんな時代にもいる。君自身だってそんな大人にならないとは限らない。いつまでもそれを続けていいのか。

君は③ ウインドウ部系の部活動をしているかもしれない。ぼくも空手道部だった。雪の中で砂場に水を張り、腰まで水につかって練習した。「つらいと思うからつらいんだ！」と先輩に怒鳴られた。先輩のいう通りだった。修行を続けるとだんだんつらくなくなつてきた。

自分を強くすることを目的とした修行だから、そうした感じ方がいいことだ。□ Z いつもそのように考えるのはマズい。本当はひどい環境を作った悪いヤツがいるのに、君が修行でたえてしまえば、悪いヤツがほつたらかしくなる。悪いヤツはなんとかした

きやいけない。

いまの社会は昔に比べて選択肢が増えた。いいことだ。でも君は選択肢をちゃんと「知っている」だろうか。知っていたとして、選択肢を「選ぶ能力」はあるだろうか。それ次第では、君はとんちんかんに「他者のせい」にしたり「B」にしたりしかねない。

ところが、単に「D 自由」にふるまうだけじゃ、君は幸せになれないんだ。そこで「人が幸せに生きる」ために必要な条件を「E 尊厳（自尊心・自己価値）」ということを軸に考えてみよう。自由だけで尊厳が得られるだろうか。自由と尊厳はどんな関係にあるのだろうか。

選択肢を知っていて、選ぶことを邪魔するものがなく、選ぶ能力があることが「自由」だといったよね。自由であるにも、能力が必要だということだ。そういう能力がとぼしい人はどうしたらいいのか。修行すればいいのか。修行している途中で死んだら浮かばれないよ。

能力によって自由を楽しめる度合いが違ってくる。これは本当のことだ。でも能力がとぼしいからといって過剰にみじめにならず、自分がそこにいるでもいいんだ、自分は生きていていいんだ、自分は他者に受け入れられる④ ソンザイだ、と思える。それが「尊厳」ということだ。

自由だけじゃ、みんなが幸せになるのは⑤ ムリだ。自由が別の人の自由をおしのけないようにルールを調整するのは大切だけど、F それだけじゃ足りない。たとえば、社会には文化があつて、自己主張が上手な人が得をする文化の国もあれば、協調性が高い人が得をする文化の国もある。

宗教も文化の⑥ 一種だ。キリスト教の国ではキリスト教徒は生き

やすいけど、イスラム教徒は生きにくい。イスラム教の国ではイスラム教徒は生きやすいけど、キリスト教徒は生きにくい。みんなに⑦ ビョウドウに権利をあたえても、社会ごとに誰が自由に生きやすいかが変わるんだ。

みんなが尊厳をいだいて生きられるようにするには、自由を⑧ ソンチョウしようというだけじゃ足りない。社会が⑨ イッショクの文化に染まっていれば、別の文化の人は生きにくくなる。どんなに「自由にしてもいいですよ」といわれても、自由を利用できるチャンスが限られてしまうからだ。

自由だけじゃみんなの尊厳を支えられない。そこで社会学では、みんなの——より多くの人たちの——尊厳を支えるには、「自由」と⑩ 多様性の両方が必要だと考える。自由だけだと、多数派や強い人たちの色に社会が染まりすぎる。いろんな色が必要なんだ。

（宮台真司『14歳からの社会学』）

問一 ——線①「絶（えず）」、②「セキニン」、③「ウンドウ」、④「ソンザイ」、⑤「ムリ」、⑥「一種」、⑦「ビョウドウ」、⑧「ソンチョウ」、⑨「イッショク」、⑩「多様」のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二

X	・	Y	・	Z
---	---	---	---	---

に入る最も適当な言葉を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい（同じ記号をくり返し使うことはできません）。

アもしくは イでも ウまた エたとえば オここで

問三 — 線A「選択肢を知っていて、それを選べる」という状態に当てはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 学校に行くという選択肢を知っていて、学校に行けること。
- イ 学校に行くという選択肢を知らないで、学校に行けること。
- ウ 学校に行くという選択肢を知っていて、学校に行けないこと。
- エ 学校に行くという選択肢を知っていて、学校に行かないこと。

問四 — 線B「選ぶ能力」とありますが、それを身につけるためにはどうすることが必要ですか。本文中から14字でぬき出しなさい。

問五 — 線C「この段階」とありますが、どのような段階ですか。それを説明する次の文について、空欄に入る言葉を本文中から5字でぬき出しなさい。

選択肢を知っていても、何を選んだらいいのか 段階。

問六 A に入る最も適当な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 積極的
- イ 能動的
- ウ 反抗的
- エ 消極的
- オ 反射的

問七 B には、すぐ上の「他者のせい」の反対の意味になる言葉が入ります。5字以内で考えて答えなさい。

問八 — 線D「自由」とありますが、筆者は「自由」をどのようなことだと考えていますか。それを説明する一文を、線Dより後の本文から探し、最初の5字を答えなさい。

問九 — 線E「尊厳」とありますが、筆者は「尊厳」をどのようなことだと考えていますか。それを説明する一文を、線Eより後の本文から探し、最初の5字を答えなさい。

問十 — 線F「それだけじゃ足りない」とありますが、なぜ足りないのですか。30字以内で説明しなさい。

問十一 本文の内容に合う説明として、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人が幸せに生きるためには、自分で選択することのできる「自由」さえあればそれだけで十分である。
- イ 自分を強くすることを目的とした修行でつらさを感じなくなるのならば、いつもそうすべきだ。
- ウ 自由が別の人の自由を押しつけたりしないように調整しなくても、人々は協調性を保とうとする。
- エ より多くの人たちの「尊厳」を守るためには、多数派や強い人たちだけの社会にはいけない。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

倉本歩は、中学時代は女子ソフトボール部に所属していたが、陸上部の先生に声をかけられて出場した駅伝大会（長距離リレー）でその楽しさに目覚め、駅伝に強い港ヶ丘高校へ進学する。しかし、高校陸上部の後藤田コーチには、中学時代に実績のある選手しか入部できないと断られてしまう。諦めきれない歩は、顧問の高瀬先生に入部を認めてもらおうと、陸上部の練習場付近で自主練習をするようになった。次の文章は、ある日高瀬先生の指示で、歩が陸上部員と一緒に五〇〇メートルを走ることになった場面である。

あと五周、あと四周……。

頭の中で残りの周回を数えながら走るものの、延々と同じ景色が続くから、自分が何周目を走っているのが途中で分からなくなり、余計に苦しくなる。□1

かつて経験した事のない苦しさ。

完全にペース配分を間違えてしまった。

自分でもフォームが崩れているのが分かる。顎が上がり、腰が落ちてきている。錘をつけられたように腕が重い。

——腕を振れー！

くじけそうになる度、だらりと垂れ下がる腕を持ち上げ、空気を漕ぐように走った。□2

全身から吹き出した汗が皮膚を濡らし、もう一枚、別の皮を貼り付けられたようで気持ちが悪いくらい。それも、段々とどうでも良くなる。後ろから次々と追い越される。

彼女達はラインを越えたところで次々と止まる。一緒に止まらなかったが、歩にはあと一周残っている。□3

目の前に三途の川が見えた。大袈裟ではなく、地獄の苦しみだ。

——このまま死んでしまうんか……。

蟬の声を聞いた気がした。まだ、そんな季節ではないというのに。足をひきずるようにしながら、最後の一周に入る。コーナーを一つずつクリアするごとに、「あと二つ、あと一つ」と確認する。最後のコーナーを回り終えたところで、前方のフィニッシュライン上を手を振っている人がいた。□4

片手にバインダー。真白な頭と、黒いジャージ。

「頑張れー！ あと少し！」

高瀬先生だ。

励まされて少しだけ力が湧いた。お腹に力を入れ、足を踏ん張る。そして、フィニッシュラインを越えると同時に、地面に倒れ込んだ。脚の付け根が棒になったようだ。

仰向けになると、この季節にしては強い日差しが、顔に足に容赦なく降りかかった。大量の汗をかいたはずなのに、鼓動に合わせて新しい汗が次から次へと溢れ出してくる。そのまま溶けてしまいそうな勢いだ。そのくせ喉がからからで、水場に行きたいのに、立ち上がるどころか、指一本を動かすのも億劫だ。

そして、相変わらず耳の中で蟬がジージーと鳴いている。その蟬時雨の狭間で、誰かが話しているのが聞こえてきた。

「……気になるのは、フォーム……。あまり綺麗な走り方ではない

ですね」

後藤田コーチの声だ。

「そうだ。最初と最後は別人だった」

相槌を打っているのは高瀬先生。

がっかりする。

中学時代、駅伝に出場する際に正しいフォームの手ほどきを受けていたのに、今日は途中で崩れてしまっていたようだ。

「最後まで走ろうとしていた根性は買う。a 才能があっても、

走りたがらない選手よりは……」

話をよく聞こうと頭を動かしたら、コーチがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。立ち上がり、ウエアについた埃を払った。湿気を吸った埃は、うまく落とせない。

一緒に走った上級生や一年生達が、何事もなかったようにダウンジョグを始めていた。

「もう走りたくないでしょう？」

上から見下ろされたから、胸を張って自分を大きく見せるようにした。

「平気です。これぐらい」

精一杯、虚勢を張る。

後藤田コーチは「へえ」といった表情をした。

「多少は走れるようだけど、大会の経験は？」

「中学三年の秋に、駅伝の大会に出ました。地区大会を勝って全国大会の予選に進みました。そこで……、負けました」

「私は記憶力がいいんだけど、倉本という名前に覚えがない」

「中学時代はソフトボール部所属で……。長距離走は得意だった

ので、陸上部の顧問に声をかけられて……。中三の秋に駅伝のメンバーに加わりました」

「トラック競技には出場してなかったんだな？」

「してません。b 駅伝は走りたいんです。走っていて、とても楽しかったです」

「楽しい？」

目を細めた拍子に、コーチの片方の頬がぴくんと引きつった。

「舐めてるわね」

走りきった後の心地よい高揚感が、一気に①降下してゆく。

「陸上部員達が辛い練習に耐えていた間、あなたは一体何をしていたの？」

ii 頭から冷たい水をかけられた気がした。膝が震え、c その場に座ってしまいそうだった。

陸上部の練習は走るばかりで、面白くなさそう。

d 走る練習ばかりしてる割りには、一緒に走ると自分より遅い子もいる。弟の勝負だって、陸上部のくせに全然走れてない。

練習なんかしなくても、自分は速く走れる。

だから、自分は並みの人間じゃない。

そんな勘違いと奢りを、後藤田コーチは一目で見抜いてしまったのだ。

コーチは無言のまま歩の顔を見ている。こうしている間にも、考えている事を全て、読み取られていそうだ。

「陸上競技は練習も地味だし、マスコミの扱いても、球技やフィギュアスケートなんかとは比べものにならないぐらいお粗末。実業団の大会はガラガラで、半分も席が埋まってない。それなのに、駅伝

とマラソンだけは別格。② 沿道に人が溢れ、延々と生中継で放送される。駅伝なんて国際大会の種目に入っていないのに。だから、勘違いする子が出てくる。あなたも、陸上じゃなくて駅伝が好きなんですよ？」

返す言葉がない。

「私達が最終的に目指しているのは、将来、トラック競技の**中長距離**やマラソンで、世界を③ 視野に入れた活躍ができる選手を育てる事。駅伝は、あくまでトレーニングの一貫。沿道の人に応援してもらいたいとか、マスコミに注目されたいとか、その④ ティドの考えの子は来て欲しくないの」

頬が熱い。

悔しさからではない。体の内側から起こる、**A** 正体の分らない感情からだ。

自分が駅伝をやりたいと思った⑤ トウキは何だったんだろう？

ただ、楽しかっただけ？
違う。

中学時代はこれといった目的もなく、流されて生きていた。友達が一緒だからと⑥ 安易に部活や進学先を決めてしまっていた。それが、駅伝に出会ってからは自ら担任に掛け合い、両親に何の相談もなく志望校を変え――。

自分を突き動かしたものは一体、何だったのだろうか？

さっと一人の少女の姿が、頭の中を駆け抜けた。

あ……。

目を閉じると、浮かんでくる。可憐な美少女が、美しく走り、美しく勝つ様が。

そうだった。

店に置かれたテレビで、同い年の女の子の走りに圧倒され、焦がれるような思いを胸に抱いたのだった。

「強くなりたいです！」

自分でも驚くほどの大声で、コーチも**B** 弾かれたように目を見開いた。

「全国大会に出てる一流選手みたいに速く、綺麗に走って……、大会で勝ちたい……。少しでも近付きたいです」

――彼女に……。

走る姿だけで歩の価値観を覆ってしまったあの子。あの子のようになりたいのだ。

「お願いです！ 速く走れるようにして下さい。同じになれんでもいい。少しでも、今より強くして下さい」

コーチがじつと顔を見ていた。

「そんなに、走るのが好きなの？」

「は、はい。好きです。大好きです！ 今からでも走れます」
嘘ではなかった。

走っている時はあんなに苦しくて、もう走りたくないと思っっているのに、終わってみればまた走りたくなっている。今だって「もう一度走れ」と言われたら、やっぱり走ってしまうだろう。

ふっと溜息の音がした。

「そう言ってもらえるのも、今のうちだけ……」

後藤田コーチは背中を向けると、さっと手を振った。ちようどダウンジョグを終えた部員達が水分を⑦ ホキキュウしていた。すかさず、

注1 南原さんの声が轟く。

「集合っ！」

速やかに集まる陸上部員達。今日の練習は終了だ。部員達は、高瀬先生とコーチの前に立ち、「はいっ!」、「はいっ!」と連呼している。

高瀬先生の口が動いているが、何を言っているのか聞こえない。

並んだ部員達が一斉にこちらを見た。総勢十三人。息を呑む音が、聞こえたような気がした。

「注2 畑谷っ!」

後藤田コーチの一声で、「はいっ!」と畑谷さんが手を上げた。

「一ヶ月遅い始動になるから、面倒を見てやって。以上、解散っ!」
呆然と立っていると、畑谷さんが走りヨってきた。顔が強張

っている。怒っているのかと思っただけだった。

「凄い……。倉本さん。本当に、あのコーチが折れた……」
顔を覆って、笑い出したいのを堪えている。

「……やったね。おめでどう……」

「え、え……」

何かの冗談じゃないかと思った。

今日の自分の走りはサイテイだったし、コーチからは考えの甘さを指摘された。絶望の底に落とされたような気分でしたから、すぐには信じられなかった。

(蓮見恭子『襷を、君に。』)

注1 「南原」…陸上部の部長、高校三年生。

注2 「畑谷」…陸上部の副部長、高校二年生。歩が陸上部に入部できるように、前から応援してくれていた。

問一 線①「降下」、②「沿道」、③「視野」、④「テイド」、

⑤「ドウキ」、⑥「安易」、⑦「ホキユウ」、⑧「連呼」、⑨「ヨ(って)」、⑩「サイテイ」のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 次の一文を入れる所として最も適当なのは、
の中のどこですか。1〜4の数字で一つ答えなさい。

その一周、たつたの四百メートルがとてつもなく遠く感じる。

問三 線i・iiの本文中の意味として、最も適当なものを次

から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

i 「脚の付け根が棒になった」

ア 疲れ果てて、足の筋肉がこわばってしまった。

イ 走りすぎて、足が一気に細くなってしまった。

ウ 倒れ込んで、骨が折れそうになってしまった。

エ 歩き続けて、動けないくらい疲れてしまった。

ii 「頭から冷たい水をかけられた」

ア 落ち着いて冷静に考えられるようになった。

イ 急上していた体温が下がって平熱になった。

ウ 意欲や元気な気持ちやうばわれてしまった。

エ 驚きで何も考えられなくなってしまった。

問四 a、b、c、dに入る最も適当な言葉を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい（同じ記号をくり返し使うことはできません）。

アでも イ今にも ウそれに エたとえ オさて

問五 線A「正体の分からない感情」とありますが、これに当てはまるものを次から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 今からでも走りたいくらい走ることが好きだという気持ち。
イ 陸上競技ではなくて駅伝で走ることが好きだという気持ち。
ウ 以前テレビで見た少女のような走りをしたという気持ち。
エ 自分の考えの甘さを指摘されて悔しくてたまらない気持ち。

問六 線B「弾かれたように目を見開いた」、C「顔が強張っている」とありますが、これは本文中ではどのような感情を表現していますか。最も適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい（同じ記号をくり返し使うことはできません）。

ア 怒り イ喜び ウ恐れ エ驚き オ悲しみ

問七 線D「あのコーチが折れた」とありますが、

(1) 具体的にはどういうことですか。次の文のX・Yに入る言葉を、それぞれ4字以内で考えて答えなさい。

Xが陸上部にYことを、後藤田コーチが認めたということ。

(2) 後藤田コーチが(1)のように考えを変えたのはなぜですか。50字以内で説明しなさい。

問八 線E「考えの甘さ」とありますが、この「考え」とは歩のどのような考えですか。それを説明した次の文のI・II・IIIに入る言葉を、それぞれ5字以内で本文からぬき出しなさい。

Iなんかしなくても、自分はII走れるから、自分はIIIじゃないという考え。

問九 次のア～オについて、歩の説明にはA、後藤田コーチの説明にはB、どちらでもなければ×と答えなさい。

ア 遅くても走っている選手をはげまして力づけている。
イ 力は不十分だが、最後まで走ろうとする根性がある。
ウ 辛くても「平気だ」と嘘を言ってごまかそうとする。
エ 駅伝大会で活躍する一流選手を育てようとしている。
オ 考えの甘い人は陸上部に入って欲しくないと考える。